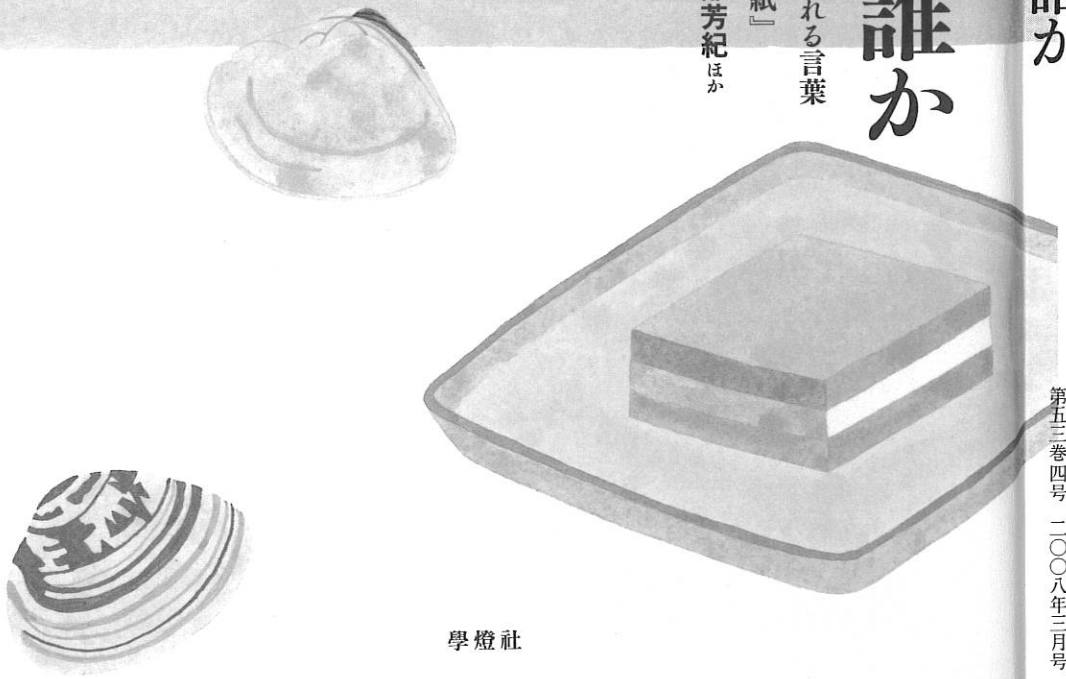
國文學 3

日本語・日本文学・日本文化 ―― 解釈と教材の研究

二〇〇八年 第五三巻四号

特集 太宰治とは誰か

- 田中和生 太宰治の現代性――「他者」に触れる言葉
- 佐藤厚子 「新しい物語」としての『お伽草紙』
- 松本和也、相馬正一、藤原耕作、木村綾子、渡部芳紀 ほか



學燈社

國文學 3 特集 太宰治とは誰か

國文學 解釈と教材の研究

平成二十年三月十日発行（毎月一回十日発行）第五十三巻第四号（三月号）
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五三巻四号 二〇〇八年三月号

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

江戸狂歌本選集 全十五巻完結
選集刊行会編 明和～安政期の江戸の代表的な狂歌集七十四種を原本に忠実に初めて翻刻した。江戸文芸の研究には必須の資料。第十五巻発売中 定価各一五七五〇円

古文書・手紙の読み方
増田 孝著 難解・難読の古文書の手紙の判読の方法を入門者でも解読できるように、著者が推賞する筆跡法を紹介しながら懇切丁寧に解説した定価一八九〇円

太宰文学の研究 〈残部僅少〉
三谷憲正著 前期・中期・後期の文学、太宰治試論の四章に分け、太宰文学を典拠・題材・新聞等の資料から全面的に洗い直し、再発見をする。定価七八七五円

日本語の文体・レトリック辞典
中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

CD-ROM版 **くずし字解読用例辞典**
山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆定価二九四〇〇円

（価格は税込）

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1―17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

半世紀にわたる与謝野研究の集大成！

新版 評伝 与謝野寛晶子 明治篇
逸見久美 著 A5判上製・768頁・定価一二、六〇〇円
発売中 好評を博した旧版『評傳 與謝野鉄幹晶子』から32年、『与謝野寛晶子書簡集成』や『鉄幹晶子全集』の編集をつとめた著者がその成果をもりこんだ与謝野研究の決定版。具体的な作品や書簡資料の最新研究成果をふまえ、寛・晶子の生涯を描く。本書は寛と晶子の生い立ち・出会いから、『明星』の創刊から廃刊まで、新詩社の動向、『みだれ髪』刊行や寛の渡欧までの激動の明治期を収録。

与謝野寛晶子書簡集成
逸見久美 編 全四冊完結 A5判・定価四三、四七〇円
第1巻 明治25年～大正6年 書簡416通収録・308頁
第2巻 大正7年～昭和5年 書簡557通収録・368頁
第3巻 昭和6年～10年 書簡534通収録・312頁
第4巻 昭和11年～17年・索引他 書簡601通・392頁
（①～③定価各一〇、二九〇円・④のみ定価一二、六〇〇円）
日記の存在しない与謝野夫妻の日常をつぶさに語る明治25年河野鉄南宛寛書簡から晶子没年までの未公開書簡千三百通を含む二千百余通を収録

夢之華全釈〔晶子第六歌集〕 発売中
逸見久美 著 A5判上製・312頁・定価五、九一三円
結婚後の心情を赤裸々奔放に詠んだ歌集を丹念に評釈

八木書店 出版部
【呈詳細内容見本】＊定価は本体＋税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄
03-3291-2961〔FAX-6300〕http://www.books-yagi.co.jp

ISSN 0452-3016
雑誌 03787―3

4910037870384
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承

―遊働世界に生きる―

第六回　夢の在りかを覓めて―境界認識の原像―②山の出現・躍動

本荘雅一

霊界めぐりとしての観光

託宣や夢のお告げで発見された聖地は、神社仏閣といった聖所として演出されると、今度はそこへ行けば霊夢を得られるという期待がもたれていった。それら伝承の真偽はともかく、夢告を受けられると人々に信じられ、期待される話がおびただしく存在するのはまぎれもない事実である。いったいどういうわけで、特定の場所が、夢の霊験と一つに発想されるのだろうか。なぜそのようなコンステレーション（布置）が盛んに起きたのだろうか。

本来は、託宣や霊夢といった、いわゆる超常現象に限らず、何か特殊なイメージ世界に転換できる場を、聖地としていたのであろう。観光地という言葉は言い得て妙で、そこへ行けば、非日常的な光＝風景（夢）が観られるという意識が前提となっている。

今は観光といえばその土地の古い建造物を見てまわることが多いが、旅行者はべつに建築学研究のために、技術や様式の調査をしているわけではない。歴史の勉強をしているポーズをとって、実はそうした建造物をアクセサリーとした大地、山、水域、空を見、過ぎし世の天地の姿を垣間見ようとしているのである。その土地ならではの風光を見たい。なぜか。日本人にとっては、風光・景物が神であって、日常の彼岸にある異界の霊威を身に受けることが、生命力の増進につながるという心意伝承があるからだ。

ヤマトタケルをはじめとするさすらいのヒーローとは、本来は、さすらうがゆえにその人物は英雄化する。だから、現代人ならば外国にも行きたがる。日常世界からかけ離れた異界めぐりをすれば、単にそうしただけで、常人とは異なる霊威を身につけた気持ちになれるのである。必要以上に誇らしげに外国経験を語りたがる人々も、やたらと感心する人々も、そうした心意伝承を体現しているにすぎない。私はべつにひがんで言っているわけ……でもあるが。

旅行者達はきまって、その土地の風景を見、飲み物を飲み、食べ物を食べ、現地人と束の間の交渉をし、旅館に泊まって夢を見て、お土産を買ってくる。あたりまえの様だがよく考えるとおもしろい。つまりその異界のさまざまな生命指標に触れ、マナを摂取し、夢見経験をすること、それが日本人にとっては異界の霊威を身につけた証拠となる。そして、土産を持ち帰り、同行しなかった知人に配る。それは威霊の分配に等しい。日本の観光地として著名な神社仏閣の近くに旅館が多いのも、霊地だからこそ食べて呑んで、夢を見るべきという心意伝承が観光客に働くからに違いない。そうした意識がないのなら、宿泊所は移動に便利な駅の近くでよいはずだ。

では、そもそも土地から夢が与えられるという図式が整えられるために、日本人はそこでどんな原体験をするのだろう。

前回に引き続き、大和の泊瀬に着目してみると、やはり山の存在が大きい。たとえば雄略紀六年春二月条に、次のような記事がある。

天皇、泊瀬の小野に遊びたまふ。山野の體勢を観して、慨然みて感を興して曰く、

隱國の　泊瀬の山は　出で立ちの　よろしき山　走り出の　よろしき山の
隱國の　泊瀬の山は　あやにうら麗し　あやにうら麗し

「山野の體勢を観して、慨然みて感を興して」に注目したい。「感を興して」はもう一つ用例がある。この記事の前の年、雄略紀五年春二月に、天皇が葛城山で狩をした。その時に失態を犯した舎人を誅殺しようとしたが、その舎人の詠んだ歌に「感を興し」た皇后に諫められて、思いとどまったという話である。すなわち「感を興」すとは、「哀切・慈しみの情を催す」という文脈を作っている。それをそのまま当てはめるなら、六年二月の狩に際して雄略天皇は、泊瀬の山の姿態に慨然と心慄わせ、慈愛の情を催して、山讃めする歌を詠んだということになる。狩猟と国讃めとが儀礼的に布置される例は、万葉集などには枚挙にいとまがないが、ここはその原形を示そうとしているかのようだ。しかし人間に対し

てのみならず、山に慈愛の情を催すとはどういうことだろう。

あたらしき山のあれまくをしも

前掲「雄略天皇」の歌意について、岩波日本古典文学大系の頭注は、「泊瀬の山は、家から出た所にすぐ見える見事な山である。家から走り出たところにすぐ見える美しい山で、泊瀬の山は何とも美しい。何とも言えず美しい」と説く。「家から出て」、「家から走り出て」といった解釈は疑問。ここはむしろ、山の姿そのものについての形容と見るのが素直ではないか。「あの人は押し出しがよい」と、貫禄や風采のことを言うのと同じように。『万葉集』に次のような類歌がある。

隠口の　泊瀬の山　青幡の　忍坂の山は　走出の
宜しき山の　出立の　妙しき山ぞ　あたらしき　山
の　荒れまく惜しも　（巻十三　三三三一）

岩波新日本古典文学大系の脚注には、地形としての観点の事例が引かれてある。『青森県五戸語彙』に「ハシリ。峰筋がうねうねと続いて何里も下方へ延びてその突端が川目、沢目になっている地形名」とあるという。それに調子を合わせてか、「出で立ちの」についても「山の高いさまを言う」と、平凡だが地形表現として説く。ただ、泊瀬山付近の山並みは標高五〇〇メートル前後。泊瀬川をはさんで東側には標高七～八〇〇メートル前後の山並みが見えているのだから、泊瀬側の山並みをことさら「高い」と解釈するのはいかがなものか。私なりの見解は、後段で述べる。結句については、心惹かれる立派な山が、荒れ果ててゆくのを惜しむ、と新旧両大系本とも同じように解している。

折口信夫は、これが挽歌に分類されているのを踏まえて、「美しい人の死んだのを、その葬った山に寄せて、惜しんだ歌である」（『全集六』万葉集事典）という。

これら諸説を機械的に集約すると、「美しい山に恋しい人の死体を葬って、その山までが荒れ果ててゆき、残念だ」となる。現代人ならば何となく納得してしまうかもしれない。しかし冷静に考えてみて、山に死体を葬ると、その山自体が荒廃する、などというのはあまりにも滑稽ではないか。いくらイメージ世界の表現だとて、実物実景に親しんで詩歌を詠む古代人の感性が、それほど観念的操作をほどこすだろうか。人間の生死が自然界の盛衰に影響を及ぼすといった構図は、正直な感性から出ているとは言えない。万葉の時代に下って、あえて人間

感情を自然界に投影させようとする気構えで編集したにすぎまい。

『泊瀬小国』（一九九一年　桜楓社）を著した和田嘉寿男は、「まず雄略紀の山ぼめの歌があって、後にそれが挽歌風に整えられたのが巻十三の歌であろう」（九六頁）と推測している。『記紀』の時代に伝誦されていた山ぼめの民謡が雄略紀に編入され、万葉の時代になって、「泊瀬山はもっぱら死の山のイメージのみで捉えられていたのではないかということである。つまり、死のイメージの前に本来神の山としてのイメージの影が薄くなってしまったということである」（同）という説を展開している。

確かに泊瀬の山は、万葉集には葬送の山として詠われるケースが多い。巻三〈四二〇〉石田王の卒し時の歌

「わご大王は　隠國の　泊瀬の山に　神さびに　齋きいますと　…（中略）…　高山の　巌の上に　座せつるかも」と、風葬を思わせるものがあり、またすぐ後に、「土形娘子を泊瀬山に火葬る時」に、柿本人麻呂が詠んだ歌として、「隠國の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ（巻三　四二八）」（泊瀬山の山際に漂っている雲煙は、いとしい彼女の魂なのだろうなあ）という歌もある。

こういう事例を並べると、現代感覚では、泊瀬は暗いイメージの地と受けとめられてしまいそうだが、そうすると、後世、夢の名所となるには、途中で泊瀬のイメージに断絶があったか、あるいはイメージチェンジの演出営業を長谷寺関係者が行って成功したとか、そういうことになるのだろうか。

現代人は「死後の世界」というと、写真で見る恐山のような、爛れた奇岩のひしめき合う荒涼とした風景を思い浮かべるかもしれないが、少なくとも古代までの日本人にとって死後の世界は、その様なものであっただろうか。京都の浄瑠璃寺や平等院鳳凰堂、平泉の毛越寺などに代表されるような浄土式庭園とは、文字通り浄土、すなわちこの世の穢土を離れた浄らかな世界を表そうとしている。水に濯がれた美しい草木に囲まれ、柔らかな起伏に富んだ女体のような趣の庭。それが古代人の死後の世界観と言えよう。だから、古い時代の葬送空間について、なにやら暗いイメージばかり抱くのは、現代人の偏見、先入見にすぎないのである。

神体示現としての「あれ」

中世期に成立した『長谷寺霊験記』（続群書類従第二十

七輯下）の全五十二章の説話中、「往生を遂げた（＝死んだ）」ことを〝霊験〟とする説話が七つある。つまり神仏の加護を受けて立身出世などの利生を得るばかりでなく、人生の究極の地として往生即ち他界へ往きて生きる為の場所、という信仰もあるのである。自分の魂が落ち着く究極の風景を、泊瀬に見た、だからそこが葬送の空間としてふさわしく、夢が与えられる聖地でもあった、ということではないか。

「隠國」という枕詞の成り立ちに、谷の奥へとさかのぼって行き着いた、母胎のような地形ということがあり、天地自然の生気霊気が籠もるところという実感がはたらいていたことだろう。私的な感想になってしまうが、霊峰三輪山の麓、桜井駅から近鉄線で長谷寺駅へ向かったときの、車窓の風景が今も記憶に生々しい。独立峰のように見えていた三輪山のゆったりと座った姿が、次第に波打ちながら進行方向に融けて流れ出す。そうして朝倉のトンネルを抜けると、異様な緑が押し寄せてきた。何か吐き出されたような色彩の混濁がもりもり膨らみつつこちらを包み込もうとしているような感覚を催した。決してきれいな色使いとは言えない風景だった。しかしそうした異様さも含めて、息づいている混沌の、温かさを感じた。さまざまな生命力の集中するところ、それが泊瀬であった。こうしたことを踏まえて、万葉集巻十三〈三三三一〉の歌、「あたらしき山の荒れまく惜しも」にあらためて注目してみる。

先に確認しておきたいのだが、岩波日本古典文学大系本の解説によると、巻十三の歌の大部分は、作者不明で成立年代も不明、『記紀』歌謡のような古い流れを汲んだ伝誦歌であるという。つまり特定の個人の作ではなく、民謡のような受けとめかたをすべきで、素朴な民意を探る対象と見ることができる。

「惜し」と「惜し」の語感について、岩波大系本『万葉集』〈一〇六九〉の歌（常はさね思はぬものをこの月の過ぎ隠れまく惜しき夕かも）の補注によると、「ヲシの中心的な感情が愛着にあるのに対して、万葉集のアタラシは、対象を傍らから見て、立派だと思い、素晴らしいと感じる感嘆の気持ちが根底にある」という。

「荒れ」という古語については上原輝男がよくコメントしていた。『記紀』の和御魂・荒御魂を例にしてだが、以下のように述べている。「『荒れ』は必ずしも『荒れ』ではなくて、この漢字をあてるからいけないんで、これは『あらわれた』ととらえた方がいいらしい。あらわれたの意味は、何か兆候を示されるときということである」（『かぶき十話』一九九五年　主婦の友社　八〇頁）。つまり、「生れ」や「顕れ」と同根の言葉と見ている。「あ」に甲類乙類の区別はないし、基本的に、漢字摘要以前からの和語は、同音語は同義語、少なくとも同根語と考えてよい。「あれ」が「荒廃する」とも併存するのは、良くも悪しくも、ともかく生命の特殊印象があふれ出てきたということなのである。

巻十三の編者はおそらく、死霊を集める泊瀬のイメージから、〈三三三一〉を挽歌に分類した。それは決して誤りではないだろうが、民謡的なものと考えれば、実はもっと多義的な感情を仮託される歌でもあったはずである。朝日、夕陽を浴びたとき、霞や霧の立ちこめる中で姿を隠したり顕わしたりするとき、満月の光に照らされたとき、さまざまな状況下で、山は人をぎょっとさせる。

小学生時分の息子を丹沢山系で初めて登山させたとき、あいにくの豪雨と強風にさいなまれ、その山域全体が厚い雲に覆われて、真っ白な闇の中を歩くはめになった。稜線の、何も遮るもののないところで一休みしていると、銀色の雨ガッパでちょこんと丸くなって座っている子の後ろ姿が、白い闇になじんで消え入りそうな切なさも覚えた。と、突然虚空に巨大な影がぬうっと現れた。本当に腰を抜かしそうになった。何かの加減で雲が一時的に薄くなって、隣の尾根の山影が見えただけ、晴れていれば、私は何度も歩いたコースで珍しくもない風景だったはずだ。それでもこのようなときは、素直に〝神の姿〟に打たれる。こうした神体示現は、どんな環境でも起こりうる。

泊瀬などの特定の場所が名所になるのは、さまざまなトランスフォーメーションが起きやすいのだろう。雄略天皇が泊瀬の山に「感を興し」たとする記事も、泊瀬領域の活発な変容性・流動性を、人々が大切にせずにはいられない心意伝承を物語っているのである。

こうした実感からいうならば、山は確かに「出で立」つ。また、馬でも船でも電車でもよいだろうが、スピードのある乗り物から見ると、自分が動いているというよりも、風景が「走り出」して見えることもしばしばである。郡司正勝は『風流の図像誌』（一九八七年　三省堂）で問うている。「山というと『山の如く動じない』動かないものだという一般的な固定観念があるが、古代人の考える山は、むしろ動くものではなかったか」（一〇頁）。火山の噴火によって山が変形したり、あるいは新しい山ができあがったりするのも神威発動には違いない。が、そうした稀な自然現象ばかりでなく、日常風景との接触において、人々は山の生命をさまざまな相

でとらえていたのである。

郡司は同書で、日本の伝統的な祭礼や儀礼に登場する山形、あるいは雲形の作り物をめぐって展開される宇宙図を、明快かつ具体的に解き明かしていった。たとえば祇園祭礼等に出る山車や、勇壮に走る地車、「けんか山」と呼ばれる、曳き山同士のぶっつけあい、神降ろしの拠り所として臨時に作られる標の山など、大小さまざまな趣向で、日本人は動く山を造り、その生態を演出してきた。造り物ではあるが、単なるアクセサリーではない。そういった、山ならぬ山、動く山を、神威神霊発動のヴィジョンとして共有しなければ始まらぬ祭祀儀礼が存在するという点で、いのちあるモノである。いやむしろ、それがなければ何も始まらなかったということが、そうした造り物のいのちだったというべきかもしれない。

神霊の降りる山。死者を埋葬する山。山からわき立つ煙や雲を、大切な人の幽体と見た。さまざまな霊的処遇がなされる形象だからこそ、山はほめる対象にもなり、挽歌を捧げるところにもなる。しかしおおもとにおいては、並々ならぬ兆しの現れるところに、〝山〟を見つけた。「あたらしき　やまの　あれまくをしも」とは、「あたらしき　やまの　あれまく　をしも」という感動が、根源的なものではなかったか。

遊働する世界

現実の風景に一種のよろめきが生ずるのは、もちろん人間の五感にバランスのズレが生じたにすぎないのだが、それも天与のイメージとして重視するのが、日本人の感性であったのだ。泊瀬が夢の名所となるのも、こうした風景を、いわば霊景の獲得を、効果的に表現し直した結果であろう。霊夢と言われるような尋常でない夢は、かわいた言い方をすれば、特定の土地や特定の建造物の中でなくとも、見るときには見る。普通でない精神状態の時には、いかにも意味深長な感興を催す夢も見やすい。それでも私達は、何か他よりも特別な場所、夢なりパワーなり光なりがあふれ出てくる聖なる空間、というものを求めてしまう。夢の在りかを覓める。定住社会であっても、人々はその心意伝承に衝き動かされる。いや定住社会だからこそ、人々は本来の、大地の生命力を確かめる術を必要としたのだ。

旅をするのも、聖所に籠もるのも、日常の風景を歌に詠むことで、そこに意外な色気を発見するのも、勇壮な祭りを行うのも、実際には人間のふるまい、演出には違いないが、天地自然の威力の発動と、そうした

時空のたたずまいに包まれる自分とを感ずるのが第一義であったろう。心身が澱んでは生きられない。生きるには、なにより世界が生きていなければならない。澱むことなく、生き生きとふるまう大地天空にさらされること。遊働する世界に生きること。そうせずにはいられない心のありようが、私達にも伝承されているのである。

「遊働」とは、近現代ドイツ哲学の川原栄峰著『ハイデッガーの思惟』（一九八一年　理想社）で使われている言葉である。Spiel の訳語として作られたものだ。一般的には「遊戯」と訳されている。小学館の『独和大辞典』では、「（一定のルールをもつ）遊戯、ゲーム、遊び、たわむれ」という訳例の他に、「（自由意思を持たないものの不規則かつ無目的な）動き」とも説明されている。こうした語感を踏まえて、ハイデッガーは Spiel に独特な意味を与えているのである。川原によると、der Spielraum（遊働空間）という語の、ハイデッガーによる意味付けは、「『遊働』とは四者（世界と地と、神々のすべての近処と遠処との座）の「争い（働きかけあい）を言おうとしている」（五八五頁）ものであるらしい。「四者」というのは、「四才」とも表現され、天・地・人の「三才」に加えて神を併せたもの。ここで言う「才」とは、「万有の基本的類別」（小学館『日本国語大辞典』）である。そうした、「もろもろの処の連関遊働が場処である」（五九五頁）ともいう。

たとえば東京タワーという場処が成り立つには、テレビを見たい「人」のニーズ、電波を走らす「天」の働き、巨大な建造物を支える洪積層の「地」、といった条件がからみあう。脱線ついでだが、中沢新一によると、タワーのある港区芝公園付近は縄文海進期には海に突き出た洪積台地の半島だったらしい。さらに、近接する芝増上寺の地が、古代の古墳群の遺跡であり、今でもタワー付近は寺・墓地の多い死霊の淵のような領域であるという（「神」性）。また、朝鮮戦争で遺棄された米軍戦車を安く買い取ることで得られた良質の、しかも血にまみれた大量の鉄を建材として再利用し、建設されたと（「人」の営み）、その因縁を感慨深げに指摘している（中沢新一『アースダイバー』第4章　二〇〇五年　講談社）。そうした聖域・「神」域に、天空への橋渡しとしてのタワーが伸び上がっていることになる。

こうした大げさな例で考えなくても、たとえば茶碗や箸であっても、それは天・地・人・神「四才」の「連関遊働」によって成り立っているということになる。すなわち特定の事物（＝場処）が成り立つための根本条件が連関し合うことを、「遊働」と表現しているのであ

る。

こうした意味内容も踏まえつつ、私はもっと素朴な概念で使わせてもらう。

初めてこの語を見たとき、「遊動」ではなく、「遊働」という文字の当て方に感嘆した。理性的な目的や効率効用から超越した「遊」に関しては共通で、「ドウ」の字に人偏があるかないかの違いである。が、意味深長な違いだ。人偏無しの「遊動」だと、単なる物理運動であり、素朴な意味で、現実空間の中を何かが動き回っていることを表すにとどまる。人偏付きの「遊働」ならば、何か意思的な力による働きを想定した表現になる。個人の意思というよりも、もっと超越的な、宇宙の意思とでもいうべき、はかりがたく、それでいて本質的には無目的でないような運動を、意味できよう。

ここまで述べてきた文脈に即すならば、泊瀬の山が遊働し、祭りの場ではさまざまな山の造り物が遊働する。人の感覚の錯覚であったり、人の手による演出であったりするかもしれないが、そうであっても私達の心意が素直に経験しているのは、世界そのものの遊働、であったはずである。トランスフォーメーションという遊働世界、コンステレーションという天地人神の連関遊働、というふうに、総括できる言葉ではないかと考えている。

上田篤の例を借りると、縄文期の人々の交通は、山のほうが安全で、平地は舟を利用しないと危険なほど水浸しであった（『日本人の心と建築の歴史』三七頁）。大地なのか水域なのかが曖昧で固定していない、優柔不断な空間。変革・転換というよりも、曖昧ににじみあっているのがあたりまえな遊働空間。しかしそこにこそ私達は、人間が生きて活動するにふさわしい生命力を感じてはいまいか。そんな泥臭いようなダイナミズムによって生かされることに、喜びを感じてはいまいか。少なくともそんな意識がさまざまに様相を変えつつも、遊働そのものに生活の本来的な根拠をおきたがる心意伝承だけは、縄文以来途切れることなく生きているのではないか。

コンクリートの箱に暮らす人々は、休暇にわざわざ川の中州にテントを張って、濁流にのみこまれてみたりもする。高いお金を出してテーマパークへ行って、自らすすんでびしょぬれになりながら宙空でもみくちゃにされる乗り物に興ずる。名勝観光というと、水辺の浸食地形がおきまりだ。いずれも遊働世界に翻弄されなければ、生きている感じがしない心意伝承ではないか。

神託や夢託によって、聖域が発見されるという伝承自体は、読みかえれば天地自然の風景に、豊かな遊働性を

感じたことを、そうした霊験譚によって後付け説明したにすぎない。

しかしこれで問題が解決したという気分には、まだなれない。確かに、どのようなところでも、人が住まい、惹かれるところには、多かれ少なかれ遊働性が見つかるだろう。そうした中でも、泊瀬等のように、特別に強い信仰を集める所、人々の意識が特に集中する場所について、もっと追究することで得られるものもあるのではないか、どうもそんな気がする。たとえば、

①何か日本人の心を揺さぶる典型的なイメージ世界というものがありはしないか。

②またそうして得られた世界、風景にたいして、実際人間が居住したり、訪問したり、なんらかの人為と組み合わせするための整え方というものも、あるのではないか。

③そもそもそうした遊働性との邂逅の連続が人生であるが、いわゆる終の棲家というか、私達にとって究極の場というものを判断するための、極めつけの原風景認識（境界認識）というものはないのだろうか。

以上の三点を、考えてゆくことにする。